

領域「表現」における造形表現の専門的事項とは何か
—滋賀短期大学の講義概要とシラバスの変遷を手掛かりに—

深尾 秀一*

滋賀短期大学 幼児教育保育学科

Defining Expert Skill or Knowledge in the Field of "Art Expression" in Early Childhood
Through an Analysis of the Transition of Shiga Junior College Art Education Lecture
Summaries and Syllabi
Hidekazu FUKAO
Department of Early Childhood Care and Education, Shiga Junior College

Abstract: Since The Shiga Junior College opened in 1970, it has produced many childcare workers in the early childhood education field. Many researchers and educators have accumulated knowledge related to early childhood education and childcare, and have contributed to early childhood education in the community by passing that knowledge on as instruction to college students. Our curriculum organization has changed with each revision of the educational guidelines, and our school has fulfilled its duties as a school of education. One of the changes we made based on the 2018 revision of kindergarten guidelines is that the curriculum composition shifted from the perspective of subject learning to that of domain learning.

The main topic of this thesis is to find out what should be taught in pre-elementary art expression education by examining past lecture summaries and syllabi of Shiga Junior College, because as a school of education, our main focus as the curriculum changes is the basic issue of what we should teach the students; that is, what direction the transition of the outlines of the University's lectures and syllabi should take.

As a result, it has become clear that the emphasis of the curriculum has changed from the Showa Era, in which students had to learn and produce adult-level art before learning how to teach pre-elementary art expression, to the Heisei Era, in which there was more focus on making the childcare workers more aware of the child's development when teaching art expression. In order to support the development of the various sensibilities of individual children, we must educate future childcare workers to firstly be able to understand the children, to have the basic ability for art expression, and to be able to make adjustments and responses that are close to the various individual sensitivities of the children.

Keyword: Art, Craft, Art Education, Early Childhood Care and Education,

* E-mail: h-fukao@sumire.ac.jp

1. はじめに

滋賀短期大学は昭和 45 年の開学以来、幼児教育保育学科において多くの幼稚園教諭及び保育士を養成してきた。その間、幼稚園教育要領、保育所保育指針、認定こども園教育・保育要領の改訂や、その他の幼児教育を取り巻く環境の変化に合わせて、カリキュラムや講義内容の変更を行ってきた。

平成 29 年の幼稚園教育要領¹⁾の改訂をうけて保育者養成のあり方は、今までになく大きく方向が変化した。造形教育に関しては、今までの教科教育としてではなく、領域「表現」の範疇として扱われることとなり、幼稚園教育要領の改訂を機に大きくあり方が変わることとなる。また今回の幼稚園教育要領においては、小学校までに備わっていてほしい 10 の姿が示され、小学校の教科学習との接続がより一層具体的に示された。幼児教育における造形表現教育と、小学校の教科教育である図画工作との接続も明確に提示されたといえる。

幼稚園教育要領の改訂が行われるたびに、改訂された部分が大きく注目される。しかし、同時に変わらなかったものをよく理解しておくことも、根底にある幼児教育としての重要な要素・専門的事項を理解するのに必要なことだと考える。

本論では、教育要領の改訂を踏まえ、滋賀短期大学幼児教育保育学科の中の造形表現教育に係るシラバスの変遷を手掛かりに、造形表現の授業内容と保育者としての、造形表現に関わる専門的事項とは何かを明らかにしていく。

2. 研究対象の背景と先行研究

2.1 滋賀短期大学の沿革

まず、滋賀短期大学の沿革と幼児教育保育学科の概要について述べておくこととする。本学、滋賀短期大学は昭和 45 年に滋賀女子短期大学として開学し、来年度開学 50 周年を迎える。現在は共学となり滋賀短期大学と名称を変更している。建学の精神は、「心技一如」であり、この建学の精神を基に豊かな教養と実践的な専門の知識と技術を培い、社会の発展と文化の向上に貢献する人材の育成を行ってきた。

開学時の昭和 45 年に幼児教育科は、服飾学科とともに 2 学科の中の 1 学科として始まり、4 月には稚園教諭二級普通免許状授与の課程認定を受け、同年 12 月に保母養成校の指定を受けている。

昭和 45 年の開学当時の定員は、50 名である。その後、幼児教育学科は、定員の変更や共学化といった変遷を踏まえ、平成 15 年に幼児教育学科を幼児教育保育学科に名称を変更して現在に至っている。令和元年度の現在の定員は 150 名である。²⁾

2.2 教育要領の変遷と造形表現教育に関する領域の概略

学校教育法施行規則に基づき、1948 年（昭和 23 年）保育要領³⁾が制定された。これは、学校教育の中に幼稚園が位置付けられたものである。1956 年（昭和 31 年）に幼稚園教育要領⁴⁾が教育内容の

より分かりやすい目標となる基準として定められた。その後、1964年(昭和39年)⁵⁾、1989年(平成元年)⁶⁾、1998年(平成10年)⁷⁾、2008年(平成20年)⁸⁾、2017年(平成29年)¹⁾に改訂されてきた。

本論の主題である造形表現についての教育内容区分は、1956年(昭和31年)の幼稚園教育要領においては、健康、社会、自然、言語、音楽リズム、絵画制作の6領域の中の絵画制作にあたると考えられる。1964年(昭和39年)の改訂では、領域としては1956年(昭和31年)のものを踏襲している。1989年(平成元年)の改訂では、健康、人間関係、環境、言葉、表現、の5領域となり、「表現」の中に造形表現が位置している。その後の領域区分は2017年(平成30年)の改訂まで同じである。つまり造形表現にかかる授業は、大きく見ると「絵画」という区分の時期と、「表現」という区分の時期があり、滋賀短期大学においてもその両区分にまたがって保育者の養成を行ってきたといえる。

2.3 先行研究

図画工作という教科だけでなく保育者の養成に関しても、佐伯育郎(2018)⁹⁾は、図画工作科や幼児教育や造形表現を実践するために必要な専門性について下記のように述べている。

筆者は、図画工作科の授業、造形表現の保育を実践するために必要な資質・能力を「図工授業力」と定義している。図工授業力は、図工的教養(能力)と授業実践力(資質)の2側面から成り立っていると考える。図工的教養と授業実践力を兼ね備えた教師を「図工授業力のある教師・保育者」として自分なりに定義している。図工的教養と授業実践力が相互作用することで、教師・保育者としての資質・能力が向上すると考えている。⁹⁾

また、佐伯育郎(2018)¹⁰⁾は、図画工作科の授業、造形表現の保育を実践するために必要な資質・能力のことを「図工授業力」と定義して、図工授業力は、図工的教養(能力)と授業実践力(資質)の2側面から成り立っていると考えていると述べたうえで、図工的教養とは、教科に関する専門性、教師・保育者としての能力に関わるものであり、図画工作科に関する知識・技術、アートとデザインに関する知識・技術、自ら教材研究・題材開発することができる力であるととらえている。また、授業実践力とは、発問・助言等の言語行動を含むコミュニケーション能力、示範(演示)や教具、ICT等も用いてわかりやすく提示するプレゼンテーション能力、直接児童を支援・指導する力のことも述べている。

3. 研究の方法と結果

3.1 カリキュラム及びシラバスの変遷の調査方法

領域「表現」における造形表現の専門的事項とは何か

滋賀短期大のカリキュラム変遷については、昭和45年度から平成30年度までの授業名および単位数を学生便覧などから抜き出し、エクセルに時系列に整理・データ化した。シラバスの内容も同じく、昭和45年度から平成30年度までの授業名、講義概要、シラバス、ねらい、目的などの文章データを、教員の異動も含めエクセルに入力・データ化した。

その後そのデータを考察し、昭和45年度から平成30年度までの中で、違いが認められた区分ごとに大きく分けた。昭和45年度から平成元年度までを昭和期、平成2年度から平成11年度まで平成1期、平成12年度から平成21年度まで平成2期、平成22年度から平成30年度までを平成3期として、4つの期間に分類した。それをもとに、カリキュラムの変遷を図式化するとともに、講義概要及びシラバスのテキストマイニングを行った。

3.2 カリキュラムの変遷の調査結果

図1は、昭和45年度からの開講授業を授業名でグループ分けをして開講授業の変遷を図式化したものである。水色のグループは、デッサンや絵画など基本的に平面表現に関する授業である。緑色のグループは図画工作で、小学校における教科教育的授業である。ピンク色のグループは、表現の授業をまとめた。但し、この授業には一部、音楽表現などの造形表現以外の表現分野が含まれている。オレンジ色のグループは、子どもの造形と幼児期の造形に特化した授業をまとめた。最後に、白色のグループは、造形教育の基礎的理論の授業である。

昭和45年度から平成元年度までは、教育要領の6領域の絵画の中でのカリキュラムが組み立てられていたと考えられる。昭和45年度から5年間、デッサンという授業が基礎的な技能として重く取り扱われている。昭和50年度以降なくなったが、昭和61年度に一年だけ復活している。

図画工作の授業に関しては昭和45年度から平成30年度まで途切れることなく存在し、デッサンの授業がなくなった後は、図画工作Ⅱの授業が新設されている。

平成元年の幼稚園教育要領の改訂以降は、表現という科目の授業数が増え、教科の授業と並列で現在まで続いてきたことが分かる。

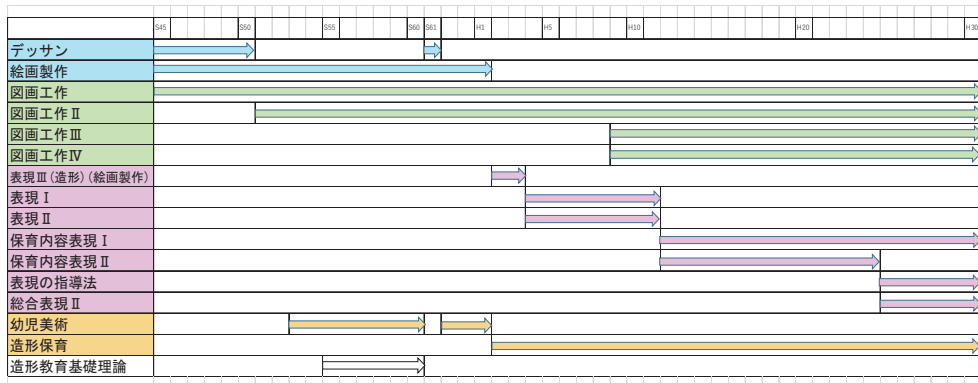


図1 カリキュラムの変遷

深尾 秀一

表1 カリキュラムの変遷

年度	科目	必修	選択	合計	年度	科目	必修	選択	合計	年度	科目	必修	選択	合計	年度	科目	必修	選択	合計
昭和45年	デッサン	1		1	昭和62年	幼児美術		1	1	平成12年	保育内容表現Ⅰ		2	2	平成22年	保育内容表現Ⅰ		2	2
総単位数	図画工作	4		4	総単位数	図画工作Ⅰ	2		2	総単位数	保育内容表現Ⅱ		2	2	総単位数	保育内容表現Ⅱ		2	2
7	絵画製作	2		2	7	図画工作Ⅱ		2	2	9	図画工作Ⅰ	1		1	9	図画工作Ⅰ	1		1
昭和46年	デッサン	1		1		絵画製作	2		2		図画工作Ⅱ	1		1		図画工作Ⅱ	1		1
総単位数	図画工作	2		2	昭和63年	幼児美術		1	1		図画工作Ⅲ	1		1		図画工作Ⅲ	1		1
7	絵画製作	2		2	総単位数	図画工作Ⅰ	2		2		図画工作Ⅳ	1		1		図画工作Ⅳ	1		1
昭和47年	デッサン	1		1	7	図画工作Ⅱ		2	2		造形保育	1		1		造形保育	1		1
総単位数	図画工作	2		2		絵画製作	2		2	平成13年	保育内容表現Ⅰ		2	2	平成23年	保育内容表現Ⅰ		2	2
7	絵画製作	2		2	平成1年	絵画製作	2		2	総単位数	保育内容表現Ⅱ		2	2	合計単位数	保育内容表現Ⅱ		2	2
昭和48年	デッサン	1		1	総単位数	幼児美術		1	1	9	図画工作Ⅰ	1		1	9	図画工作Ⅰ	1		1
総単位数	図画工作	4		4	7	図画工作Ⅰ	2		2		図画工作Ⅱ	1		1		図画工作Ⅱ	1		1
7	絵画製作	2		2		図画工作Ⅱ		2	2		図画工作Ⅲ	1		1		図画工作Ⅲ	1		1
昭和49年	デッサン	1		1	平成2年	図画工作Ⅱ		2	2		図画工作Ⅳ	1		1		図画工作Ⅳ	1		1
総単位数	図画工作	4		4	総単位数	図画工作Ⅰ	2		2		造形保育	1		1		造形保育	1		1
7	絵画製作	2		2	7	図画工作Ⅱ		2	2	平成14年	保育内容表現Ⅰ		2	2	平成24年	保育内容表現Ⅰ		2	2
昭和50年	デッサン	1		1		造形保育	1		1	総単位数	保育内容表現Ⅱ		2	2	総単位数	保育内容表現Ⅱ		2	2
総単位数	図画工作	4		4	平成3年	図画工作Ⅰ	2		2	9	図画工作Ⅰ	1		1	9	図画工作Ⅰ	1		1
7	絵画製作	2		2	総単位数	図画工作Ⅰ	2		2		図画工作Ⅱ	1		1		図画工作Ⅱ	1		1
昭和51年	図画工作Ⅰ	2		2	7	図画工作Ⅱ		2	2		図画工作Ⅲ	1		1		図画工作Ⅲ	1		1
総単位数	図画工作Ⅱ	2		2		造形保育	1		1		図画工作Ⅳ	1		1		図画工作Ⅳ	1		1
6	絵画製作	2		2	平成4年	表現Ⅰ	2		2		造形保育	1		1		造形保育	1		1
昭和52年	図画工作Ⅰ	2		2	総単位数	表現Ⅱ	2		2	平成15年	保育内容表現Ⅰ		2	2	平成25年	保育内容表現Ⅰ		1	1
総単位数	図画工作Ⅱ	2		2	9	図画工作Ⅰ	2		2	総単位数	保育内容表現Ⅱ		2	2	総単位数	表現の指導法	1		1
6	絵画製作	2		2		図画工作Ⅱ		2	2	9	図画工作Ⅰ	1		1	8	総合表現Ⅱ	1		1
昭和53年	図画工作Ⅰ	2		2		造形保育	1		1		図画工作Ⅱ	1		1		図画工作Ⅰ	1		1
総単位数	図画工作Ⅱ	2		2	平成5年	表現Ⅰ	2		2		図画工作Ⅲ	1		1		図画工作Ⅱ	1		1
7	幼児美術	1		1	総単位数	表現Ⅱ	2		2		図画工作Ⅳ	1		1		図画工作Ⅲ	1		1
	絵画製作	2		2	9	図画工作Ⅰ	2		2		造形保育	1		1		図画工作Ⅳ	1		1
昭和54年	図画工作Ⅰ	2		2		図画工作Ⅱ		2	2	平成16年	保育内容表現Ⅰ		2	2	平成26年	保育内容表現Ⅰ		1	1
総単位数	図画工作Ⅱ	2		2		造形保育	1		1	総単位数	保育内容表現Ⅱ		2	2	総単位数	表現の指導法	1		1
7	幼児美術	1		1	平成6年	表現Ⅰ	2		2	9	図画工作Ⅰ	1		1	8	総合表現Ⅱ	1		1
	絵画製作	2		2	総単位数	表現Ⅱ	2		2		図画工作Ⅱ	1		1		総合表現Ⅱ	1		1
昭和55年	図画工作Ⅰ	2		2	9	図画工作Ⅰ	2		2		図画工作Ⅲ	1		1		図画工作Ⅰ	1		1
総単位数	図画工作Ⅱ	2		2		図画工作Ⅱ		2	2		図画工作Ⅳ	1		1		図画工作Ⅱ	1		1
9	幼児美術	1		1		造形保育	1		1		造形保育	1		1		図画工作Ⅲ	1		1
	絵画製作	2		2	平成7年	表現Ⅰ	2		2	平成17年	保育内容表現Ⅰ		2	2		図画工作Ⅳ	1		1
	絵画製作	2		2	総単位数	表現Ⅱ	2		2	総単位数	保育内容表現Ⅱ		2	2		造形保育	1		1
昭和56年	図画工作Ⅰ	2		2	9	図画工作Ⅰ	2		2	9	図画工作Ⅰ	1		1	平成27年	図画工作Ⅰ	1		1
総単位数	図画工作Ⅱ	2		2		図画工作Ⅱ		2	2		図画工作Ⅱ	1		1	総単位数	図画工作Ⅱ	1		1
9	幼児美術	1		1		造形保育	1		1		図画工作Ⅲ	1		1	8	図画工作Ⅲ	1		1
	絵画製作	2		2	平成8年	表現Ⅰ	2		2		図画工作Ⅳ	1		1		図画工作Ⅳ	1		1
	絵画製作	2		2	総単位数	表現Ⅱ	2		2		造形保育	1		1		造形保育	1		1
昭和57年	図画工作Ⅰ	2		2	9	図画工作Ⅰ A	1		1	平成18年	保育内容表現Ⅰ		2	2		総合表現Ⅱ	1		1
総単位数	図画工作Ⅱ	2		2		図画工作Ⅰ B	1		1	総単位数	保育内容表現Ⅱ		2	2		表現の指導法	1		1
9	幼児美術	1		1		図画工作Ⅱ A	1		1	9	図画工作Ⅰ	1		1		保育内容表現Ⅰ	1		1
	絵画製作	2		2		図画工作Ⅱ B	1		1		図画工作Ⅱ	1		1		保育内容表現Ⅱ	1		1
	絵画製作	2		2		造形保育	1		1		図画工作Ⅲ	1		1		図画工作Ⅰ	1		1
昭和58年	図画工作Ⅰ	2		2	平成9年	表現Ⅰ	2		2		図画工作Ⅳ	1		1		図画工作Ⅱ	1		1
総単位数	図画工作Ⅱ	2		2	総単位数	表現Ⅱ	2		2	平成19年	保育内容表現Ⅰ		2	2		図画工作Ⅲ	1		1
9	幼児美術	1		1	9	図画工作Ⅰ	1		1	総単位数	保育内容表現Ⅱ		2	2		図画工作Ⅳ	1		1
	絵画製作	2		2		図画工作Ⅱ	1		1		図画工作Ⅰ	1		1		造形保育	1		1
	絵画製作	2		2		図画工作Ⅲ	1		1		図画工作Ⅱ	1		1		総合表現Ⅱ	1		1
昭和59年	図画工作Ⅰ	2		2		図画工作Ⅳ	1		1		造形保育	1		1		表現の指導法	1		1
総単位数	図画工作Ⅱ	2		2		造形保育	1		1		図画工作Ⅲ	1		1		保育内容表現Ⅰ	1		1
9	幼児美術	1		1	平成10年	表現Ⅰ	2		2		図画工作Ⅳ	1		1		図画工作Ⅰ	1		1
	絵画製作	2		2	総単位数	表現Ⅱ	2		2	平成20年	保育内容表現Ⅰ		2	2		図画工作Ⅱ	1		1
	絵画製作	2		2	9	図画工作Ⅰ	1		1	総単位数	保育内容表現Ⅱ		2	2		造形保育	1		1
昭和60年	図画工作Ⅰ	2		2		図画工作Ⅱ	1		1	9	図画工作Ⅰ	1		1		総合表現Ⅱ	1		1
総単位数	図画工作Ⅱ	2		2		図画工作Ⅲ	1		1		図画工作Ⅱ	1		1		表現の指導法	1		1
9	幼児美術	1		1		図画工作Ⅳ	1		1		図画工作Ⅲ	1		1		保育内容表現Ⅰ	1		1
	絵画製作	2		2	平成11年	表現Ⅰ	2		2		図画工作Ⅳ	1		1		図画工作Ⅰ	1		1
	絵画製作	2		2	総単位数	表現Ⅱ	2		2		造形保育	1		1		図画工作Ⅱ	1		1
昭和61年	デッサン	1		1	9	図画工作Ⅰ	1		1	平成21年	保育内容表現Ⅰ		2	2		図画工作Ⅲ	1		1
総単位数	図画工作Ⅱ	2		2		図画工作Ⅱ	1		1	総単位数	保育内容表現Ⅱ		2	2		図画工作Ⅳ	1		1
7	図画工作Ⅱ	2		2		図画工作Ⅲ	1		1	9	図画工作Ⅰ	1		1		造形保育	1		1
	絵画製作	2		2		図画工作Ⅳ	1		1		図画工作Ⅱ	1		1		総合表現Ⅱ	1		1
	絵画製作	2		2		造形保育	1		1		図画工作Ⅲ	1		1		表現の指導法	1		1
	絵画製作	2		2		造形保育	1		1		図画工作Ⅳ	1		1		保育内容表現Ⅰ	1		1
	絵画製作	2		2		造形保育	1		1		造形保育	1		1		保育内容表現Ⅱ	1		1

表1は、年度ごとの授業とその単位数である。但し年度によっては、単位の表記ルールが変わっていることがみられ、表の数字のみで一概にその意味合いを読み取ることは難しい。例えば、昭和49年度の図画工作は4単位となっているが、前期後期で授業が成り立っていて他の年度とは表記が異なる。

短大2年間における造形表現に係る総単位数は、カリキュラムの改変期に一時6単位に減っている時期があるが、そのほかは7単位から9単位で変遷している。また図画工作の授業名表記においては図画工作ⅠやⅡのほかAやBといった表記もある。しかし基本的には同じ図画工作の授業において、クラスによる分け方や、開講時期に関する分け方から由来した名称の変更であった。

3.3 シラバスの変遷の調査結果

シラバスの変遷にかかる調査は、学生便覧やシラバスに記載されている各授業の目標や概要、また担当者の異動や使用教科書名をエクセルに入力してデータ化した。授業に関する情報は、学生に配布した学生便覧やシラバスの冊子から該当部分を抜き出した。

各授業の単位数及び講義概要については、昭和45年度から平成3年度までは『学生便覧』に記載されている。平成4年度は、『Syllabus 授業科目講義概要』、平成5年度からは、『履修の手引き [履修要綱 シラバス]』に記載されている。また、平成26年度からは『シラバス』に記載されている。下記の通り、4つの期間に分類をしてデータを整理し、テキストマイニングを行った。

- 1) 昭和期 昭和45年から平成元年度まで
- 2) 平成1期 平成2年から平成11年度まで、
- 3) 平成2期 平成12年度から平成21年度まで
- 4) 平成3期 平成22年度から平成30年年度まで

テキストマイニングは、記述部分を KH Coder¹⁾を利用しておこなった。KH Coder の利点は、記述文章における言葉のつながりを共起ネットワークで視覚的に表現でき、恣意的となりがちな操作を避けながらデータを考察できることである。各期において、どのような文言が使われ、何が述べているかを、共起ネットワーク図を利用し図式化した。

なお、講義概要やシラバスに関しては、比べるデータの時期ごとに、データ収集した年数や、文章量および書き方の形式が異なるため、語数や出現回数に注目するのではなく、共起や言葉のつながりを重視することとしてデータ収集と分析を行った。

表2 各時期の上位50の頻出語

	昭和45-63		平成1-11		平成12-21		平成22-30	
	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
1	造形	129	表現	257	表現	354	表現	395
2	表現	83	保育	149	保育	180	保育	185
3	基礎	58	造形	92	造形	176	造形	161
4	幼児	49	基礎	59	幼児	69	実践	111
5	教育	46	演習	57	基礎	68	幼児	104
6	デザイン	43	総合	54	総合	67	取り組む	83
7	絵画	42	能力	45	内容	55	学ぶ	80
8	研究	40	実践	41	演習	54	内容	78
9	指導	32	行う	40	行う	52	基礎	71
10	工作	30	内容	40	実践	52	理解	70
11	図画	30	幼児	38	取り組む	50	感性	65
12	製作	29	感性	37	感性	48	作品	64
13	基本	28	乳幼児	30	体験	48	活動	57
14	能力	28	基本	29	展開	48	基本	57
15	保育	28	深める	29	授業	42	課題	55
16	構成	27	豊か	29	支える	40	演習	53
17	追求	27	一層	28	基本	38	体験	52
18	理解	24	展開	28	技能	36	総合	51
19	材料	21	指導	25	乳幼児	36	制作	50
20	高める	20	技能	23	味わう	36	展開	48
21	実技	20	理解	23	能力	33	磨く	46
22	理論	20	支える	21	学習	32	自ら	44
23	演習	18	自己	20	実技	32	方法	44
24	彫塑	18	取り組む	20	深める	32	発表	42
25	版画	18	美術	20	現場	31	深める	40
26	豊か	18	味わう	20	可能	28	身	40
27	一層	17	領域	20	図る	28	現場	38
28	制作	17	応用	19	特性	27	支える	38
29	美術	17	学習	19	磨く	27	技能	37
30	体験	16	実技	19	楽しい	26	指導	37
31	題材	16	補う	19	動き	26	行う	35
32	美的	16	教員	18	平面	26	考える	34
33	養う	16	具体	18	具体	24	素材	33
34	鑑賞	15	修得	18	劇	24	用具	33
35	技能	15	動き	18	重点	24	特性	30
36	創造	15	用具	18	置く	24	可能	29
37	立体	14	研究	17	応用	22	あり方	28
38	行う	13	学ぶ	16	準備	22	具体	28
39	実習	13	劇	16	補う	22	授業	28
40	生かす	13	行為	16	用具	22	構成	27
41	用具	13	講座	16	理解	22	分野	25
42	創作	12	高める	16	立体	21	楽しい	24
43	得る	12	事柄	16	いろいろ	20	創作	24
44	必要	12	制作	16	喜び	20	領域	24
45	力	12	体験	16	基	20	準備	23
46	絵	11	特性	16	研究	20	付ける	23
47	学習	11	発達	16	自己	20	学習	22
48	玩具	11	幼稚園	16	充実	20	慣れる	22
49	共同	11	図る	15	生かせる	20	味わう	22
50	教授	11	創造	15	素描	20	材料	21

4. 考察

昭和 45 年度～平成
30 年度 講義概要、
シラバス記述の変遷
共起ネットワーク図

総抽出語数(使用)
8,898 (4,053)
異なり語数(使用)
322 (239)

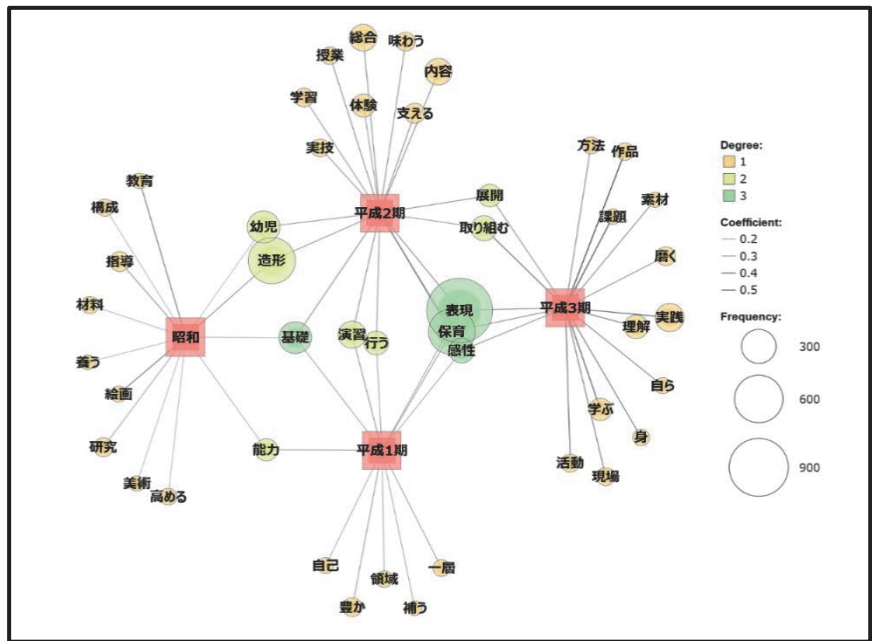


図6 昭和45年度～平成30年度 講義概要、シラバス記述の変遷 共起ネットワーク

本研究では、領域「表現」の造形表現の分野に係る専門的事項とは何かを検証するために、滋賀短期大学のカリキュラム及びシラバスの変遷を調査してきた。

昭和初期は幼稚園教育要領にある『絵画』といわれるものを中心にカリキュラムが編成されている。実技は、学生自身の作品制作による感性の育成のほかに、用具の使用方法和表現方法の訓練を目標の一つに授業を組み立てている。絵画のほかには、彫塑や版画という美術界の実技分野を中心に編成されている(図2)。しかし、昭和54年度からは、幼児美術という、幼児の保育現場における指導を焦点にした授業が始まっている。保育者として子どもを想定した演習といえる。

平成1期に入ると絵画制作という授業科目はなくなっているが、図画工作の授業内容に含まれている。この時期の図画工作の授業は絵画という昭和期の内容も含めつつ、保育者としての基礎技能と用具・教材の取り扱いを学んでいる。またこの時期には新たに表現という授業が組み込まれている。当該授業では子どもの発達と表現の特性を学び、保育者としての役割を学び能力を高めることを目的としている。その後、幼児美術が造形保育と名称を変更し、より一層現場での指導を意識したものとなっている。またこの時期から感性という言葉が出てきているがこれは保育者に必要な感性ということである。(図3, 表2) 平成8年度から、図画工作の授業が増えているが、実際は図画工作Ⅰ・Ⅱの授業を1・2・3・4.と分割し開講したためであり実際の増減はない。(図1, 表1)

平成2期においては、造形表現と感性、そして「表現する喜び」という子どもの姿を意識した内容に変化しているといえる。(図4, 表2)

平成3期に入ると、子どもの理解の上により実践的な展開を考えたものとなっている。子どもの活動を視点とした内容の授業に変化しつつあるといえる。(図5, 表2)

図6の全期にわたる共起ネットワーク図を見ると、昭和期及び平成1期は教育、指導という保育者の資質的な部分に主があり、基礎的な事項を学び能力をつけることに目的が置かれてきたといえる。オーバーラップしているが平成1期から平成3期までは、表現と保育そして感性という視点で子どもたちの活動を支えるための資質を育むカリキュラムになってきているといえる。

5. おわりに

カリキュラムやシラバスの変遷から領域「表現」造形表現の専門的事項に関して検討していくこととした。しかし、『造形表現』という言葉は造形と表現という二つの部分に分けられる。広辞苑(第7版)2018では、『造形』『表現』は下記のように示されている。

【造形】①、形体をこしらえること。**【造形芸術】**物質的材料で形象をつくり、もっぱら視覚に訴える芸術。絵画・彫刻・建築の類。¹²⁾

【表現】心的状態・過程または性格・志向・意味など総じて内面的・精神的・主体的なものを、外面的・感性的形象として表すこと。また、この客観的・感性的形象そのもの、すなわち表情・身振り・動作・言語・作品など。表出。¹³⁾

上記を踏まえ本論では、「造形」の物質的に形態を持つ成果物と、「表現」という精神的な部分から成り立っている事を念頭に今回の研究調査の検証をしていくことが重要であると考ええる。

その視点で今回の調査結果を考察すると、造形教育には欠かせない素材、材料、取り扱いという『造形』の部分と、子どもの発達・心情・活動という『表現』という二つのものが常に存在していることが分かる。主軸バランスの変化はあるものの、どちらが欠けても造形表現がなり立たないという視点で常にカリキュラムが構築されているといえる。

また今回の調査からは、昭和期に美術分野における作品の制作演習からスタートした保育者の造形表現能力の獲得というカリキュラムから、平成期になって子どもの発達と姿という視点での保育士の在り方を意識したカリキュラムとなっていることが明らかになった。表現の授業だけでなく、図画工作の授業においても子どもの表現を意識した授業内容となっているといえる。「物を作る」という造形の部分の習得を子どもの表現を支えるための基礎的事項と念頭に置いたものといえる。図画工作といながら、小学校の教科教育とは違う指導内容と目的となっていたといえる。

領域「表現」における造形表現の専門的事項とは何か

平成 29 年の幼稚園教育要領の改訂をふまえ、今後学生たちが養成校において習得すべきものは、より一層「子どもたちのあるべき姿」を想定したものとなる。特に、個々の子どもたちの様々な感性の発育を援助するためには、まず、その子どもたちを理解でき、個々の感性に寄り添える、多様な造形表現の基礎的な能力と、教材を工夫し対応できる保育者を育てるべきである。そのためには、子どもと表現に対する理解だけでなく、個々の子どもたちに対応できる「造形」部分において実践できる多様な基本的スキルの習得が必要となってくる。特に、素材や教材に工夫できる図工的教養がなければ、個々の持っている授業実践力が発揮できないということである。

領域「表現」における造形表現の専門的事項とは、幼児期の子どもたちの表現（心情の表出）の理解と、その活動を支えるに足りる造形（心情の具現化）に関する知識と技能に裏打ちできる能力である。それは表裏一体のものであり、どちらかが欠けることがあってはならない。

子どもの発育と造形表現活動の根幹を理解し実践できる、引き出しの多い人材を育成することが養成校の責務となってくる。

文献

- 1) 文部科学省 平成 29 年 3 月(2017) 幼稚園教育要領
- 2) 学校法人純美禮学園(2019)「純美禮学園 百年史」株式会社出版文化社
- 3) 文部科学省 昭和 23 年 3 月(1948) 保育要領 一幼 児教育の手引き一
- 4) 文部科学省 昭和 31 年 3 月 (1956) 幼稚園教育要領
- 5) 文部科学省 昭和 39 年 3 月(1964) 幼稚園教育要領
- 6) 文部科学省 平成 元年 3 月(1989) 幼稚園教育要領
- 7) 文部科学省 平成 10 年 3 月(1998) 幼稚園教育要領
- 8) 文部科学省 平成 20 年 3 月(2008) 幼稚園教育要領
- 9) 佐伯育郎 岡本礼子 西村富美雄 (2018) 「保育・教育に生かす造形表現・図画工作」
発行所 広島文教女子大学, p. 3
- 10) 佐伯育郎 岡本礼子 西村富美雄 (2018) 「保育・教育に生かす造形表現・図画工作」
発行所 広島文教女子大学, p. 4
- 11) 樋口耕一 (2014) 『社会調査のための計量テキスト分析 一内容分析の継承と発展を目指して』
ナカニシヤ出版
- 12) 新村出編 (2018) 『広辞苑 (第 7 版)』 岩波書店, p. 1685
- 13) 新村出編 (2018) 『広辞苑 (第 7 版)』 岩波書店, p. 2494
- 14) 民秋言他 (2017) 『幼稚園要領・保育所指針・幼保連携型認定こども園・法橋梁の成立と変遷』
(株) 萌文書林

- 15) 劉 麟玉, 宮下 俊也, 宇田 秀士, 横山 真貴子 (2018) 「教員養成における幼稚園 5 領域科目の内容構成 (5)」 奈良教育大学次世代教員養成センター 研究紀要 (4), pp. 259-265